

かささぎ

通信 第91号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 4月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

「二〇二〇年三月の「森三郎の作品を読む会」は、新型コロナウイルス感染症対策による図書館の休館のため、休会になりました。

今号では第90号に引き続き、「一人相撲」(初出『赤い鳥』一九三三年七月号)について報告します。

森三郎の「一人相撲」は、兄の森銑三による松岡於菟衛からの聞き書き「独相撲」(『大道芸のはなし』所載)を取り込んで、一日の様々な出来事の中で主人公の少年の心が揺れ動く様を描く作品でした。

森三郎が『赤い鳥』に発表した作品の中には、古典や伝説・昔話を子供向けに再話した作品が多数あります。その中でも「かささぎ物語」(一九三一年十二月号)は「三河の高浜」に伝わる歌の由来を子どもたちに語るとい形式をとって、由来話の内容そのものはラフカディオ・ハーン作「織女の伝説」(『中国怪談集他』所載)を再話したものであり、最後にまた高浜の今の子どもの達の様子を描いています。同じくラフカディオ・ハーン作「大鐘の霊」(『中国怪談集他』所載)を再話した「鐘」(一九三二年十月号)は、北京の大鐘寺の鐘の響きにまつわる言い伝えを五百年前に遡って語る話でした。三郎の「鐘」は原話の構成に忠実に、「序」の部分に鐘の響きを聞く現在の北京の母と子を登場させ、「本論」で五百年前の話を述べ、「結び」で再び現在の北京の母と子の想いに戻る形式になっています。ですから「かささぎ物語」はハーンの「鐘」の構成を踏襲しているとも言えます。

同じような構成の再話物に「めぐりあひ」(一九三四年八月号)があります。江戸の両替屋の七歳の少女がお父さんからもらった四文銭が、少女の手を離れ路地に落ち、人の手から手へと辛い旅をして再び両替屋に戻り、弟の二文

銭とめぐりあいます。それでも離れないようにとすっかりくついた四文銭と二文銭を、初めの場面の両替屋の少女がお父さんから根付してもらいます。「序」と「結び」の場面に江戸の両替屋の七つの娘と四文銭が登場し、「本論」が四文銭の旅の話です。その銭の旅の話は黄表紙・唐来三和作「再開親子銭独楽(めぐりあふおやこのせにごま)」を子ども向けに再話したものでした。

「かささぎ物語」は現在という時を前後に置いて、言わば額縁としてその中にハーンの「織女の伝説」の再話を入れ込み、「めぐりあひ」は前後に江戸の両替屋という場面を額縁として、その中に唐来三和の「再開親子銭独楽」の再話を入れ込んでいます。それぞれ額縁部分に子供を登場させていますが、本論の再話部分に子供たちは関わっていません。しかし同じように原典を取り込んだ再話物の「一人相撲」は、この二作の構成とは少し違います。松岡於菟衛からの聞き書き「独相撲」をそのままの形で紹介しているわけではありません。お使いの途中で見た大道芸の一人相撲は物語の展開のクライマックスであり、主人公の心の動きにも関わる重要な役割を果たします。今までの再話物から一歩進んだ童話としての森三郎の取り組みが感じられます。ちょうど「一人相撲」の発表された三か月前の一九三三年四月号から、森三郎の作品の傾向が変わっています。現代を舞台にした「少年少女の心理を描くリアリステックな作品」(酒井晶代『森三郎童話選集 かささぎ物語』解説二四五頁)が発表され始めました。「一人相撲」は、寺子屋の帰りにお使いに行くことになっており、江戸時代の話になっていますが、リアリステックな作品の創作という新しい手法で、少年の心の動きを描いている意欲的な作品だと思われます。(作風の変化については次号に続けます。)

次回「森三郎の作品を読む会」の作品

「銀作」(『森三郎童話選集 夜長物語』所収)

五月の開催は中止し、六月以降(未定)に延期になります。

四月の「森三郎の作品を読む会」は三月に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策による図書館の休館のため、休会になりました。